

9 節で、パウロはイエス・キリストの恵みはパウロの弱さの中でこそ発揮されると言います。パウロの弱さがイエス・キリストの恵みを働かせる場です。「自分の弱さを誇ろう」の「誇る」という単語は「頼みをかける」「信頼を寄せる」という意味もあるところから、パウロは弱さそのものではなく、キリストの力(恵み)を「働かせる場」としての弱さに頼っているのです。それは、キリストの力(恵み)を拠り所としていることになります。これと同じ内容が「キリストの力がわたしの内に宿るように」という表現で示されています。「宿る」は、永続的に幕屋を張って住みつくことを意味しますので、そこにパウロの使徒としての永続する強さがあることになります。9 節の「弱さを誇る」という表現は、10 節では「弱さにおいて満足する(直訳は「弱さを喜ぶ」)」という表現に変わっています。どちらも復活させられたキリストの力に対する信頼を示す表現です。ここで、注目されるのは「キリストのために」という言葉がついていることです。パウロが「弱さ」と言う時、それは人間に本来的に備わっている弱さというよりも、迫害や困難のような外側から加えられる弱さを示していると思われます。そういう意味での「弱さ」を、「キリストのために」、言い換えれば、キリストを伝えるに際して体験する時、パウロは喜ぶと言うのです。そして、「わたしは弱いときにこそ強いからです」と言うのです。弱いのはパウロであり、強いのもパウロです。パウロの弱さの中で働くキリストの力に強められる限りでのパウロの強さなのです。パウロは二コリ 13:4 で、「キリストは弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられるのです」、「弱いキリストこそを神さまはよしとされ、復活させた、その復活させられたキリストは今もなお、その『弱さ』としての十字架につけられたままの姿をとっているのだ」、と言います。続いて、「わたしたちもキリストに結ばれた者として弱い者ですが、しかし、あなたがたに対しては、神の力によってキリストと共に生きています」と言うのです。パウロは弱さの故に十字架につけられたキリスト自身にあやかる自分の姿を思い浮かべていると思われます。ここに、「キリストを拠り所として存在し生きる」というパウロの根本思想を認めることができます。キリストは今もなお、弱さを担い続けて、十字架につけられたままの姿をもって、しかも復活させられたキリストとして、私たちと共に歩んでいるのです。そして、復活のキリストは「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言うのです。さらに、キリストは、今なお私たちと共に苦しみつつ、呻きつつ、十字架につけられたままの姿をもって、私たちと共にいつもいるのです。私たちはそのキリストをよりどころとして生きているのです。だからこそ私たちは、十字架のキリストは私たちのための存在なのだ、と告白することができるのです。